今週のテーマ　部活動

思い出の夏合宿

市原市　無職　菅田恒治さん(72)

日本中が1964年の東京五輪に向け盛り上がっていた頃、高校のバレー部に所属していた。9人制から6人制に出場人数が変わる時期で、練習は屋外のコートが主だった。炎天下の夏合宿は、今や懐かしい思い出だ。県内では強豪校でも、全国大会では初戦敗退が多く、レベルの違いを痛感させられた。当時は「スポ根」全盛期だったが、あの頃の頑張りが社会人になっても心の支えとなり、「企業戦士」として定年まで勤められたのかもしれない。2回目の東京五輪は、孫たちとテレビ観戦で楽しみたい。

心痛む総体中止

船橋市　主婦　木暮れいこさん(70)

中学時代に所属していた水泳部の練習は、夏が特につらかった。家からプールに向かう途中、自転車をこぎながら、やめたいと思ったものだ。しかし、練習を共にした別の中学校の水泳部員は、半世紀たった今でも友人だ。高校生になると、水泳で全国高校総体に出場。そこでの監督やコーチとの交流は楽しい思い出になっている。今年は新型コロナウイルス感染拡大の影響で高校総体は中止になった。高校生活最後の晴れ舞台を失った3年生の気持ちを考えると、心が痛む。しかし、涙を流したこの経験が、無駄ではなかったと思う日がきっと来る。そのことだけは伝えたい。

仲間に励まされ

千葉市中央区　主婦　漆原香里さん(53)

体力のないことを心配した父に勧められ、中学生になるとソフトボール部に入った。新入部員はちょうど9人。「いつかこのメンバーでグラウンドに立てると良いね」と話していた。しかし、練習についていけず、いつまでたってもレギュラーにはなれなかった。それでも皆はいつも励ましてくれた。そして迎えた最後の夏の大会。敗退が濃厚だった最終回に、出場することになった。「9人そろったね」。ついに現実となり、皆喜んでくれた。忘れられない試合になった。

主役一転 裏方に

船橋市　無職　石井孝さん(70)

顧問の勧めで中学、高校の6年間、演劇部に所属し、高校3年生の時には部長を務めた。高校生活最後の演劇コンクールは、モリエールの「人間嫌い」を選び、主役を演じる予定だった。張り切って練習に励んでいたが、本番1か月ほど前に突然、盲腸を患い、舞台に上がれなくなってしまった。急きょ演目を変更し、裏方として参加したが、入賞はかなわなかった。もしコンクールで主役を演じ、入賞していたら、俳優の道に進んでいたかもしれない。今になってみると、そう思う時もある。

金力疾走 未来へ

五輪野球回顧編

題字・稲葉監督

プロアマ混合 力出せず

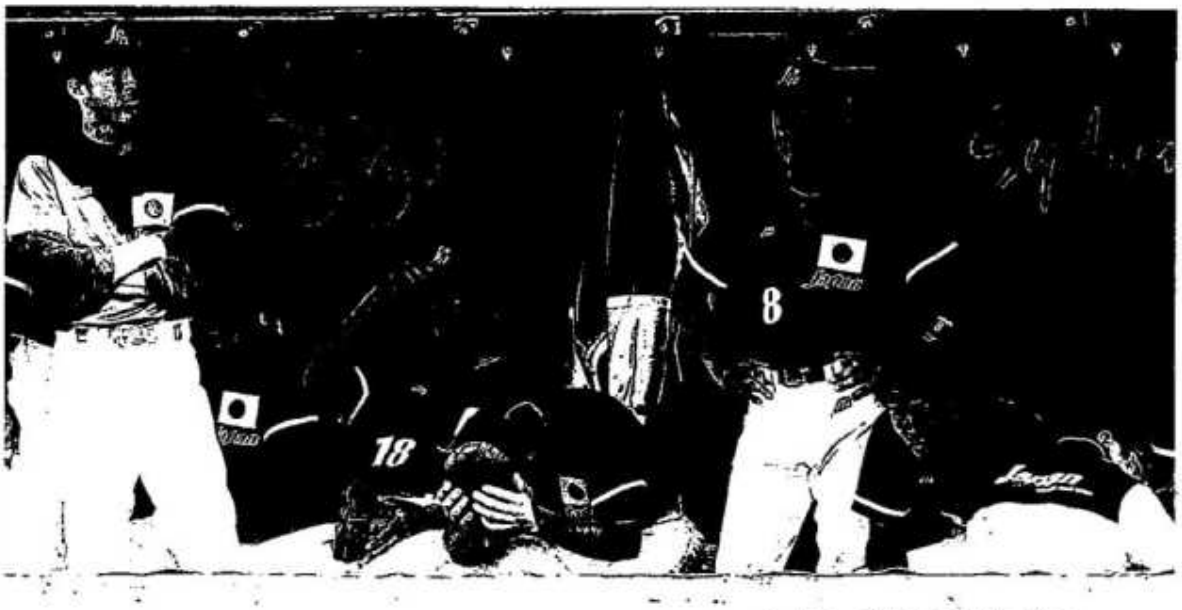
2000年シドニー 4位

五輪の野球が大きな変革期を迎えた。プロの参加が認められ、選手登録の人数も20人から24人に。バットも金属から木に変わった。

五輪の開催がプロ野球のシーズン中だったこともあり、プロの選手派遣には様々な議論がなされた。前年のアジア予選で出場権獲得に貢献したヤクルトの古田らはチーム事情もあって選出されず、松坂、黒木らパ・リーグを中心に8選手がメンバー入りした。社会人の東芝監督やアマの全日本代表監督などを務めた大田垣耕造(70)が、プロアマ混合チームの難しいかじ取りを任された。

(敬)

9月17日の初戦を前に、プロが合流したのは数日前。「練習時間が少ない中で、どうやって一つのチームにするか」が課題だった。



シドニー五輪の3位決定戦で、韓国に敗れてベンチで肩を落とす松坂（左から3人目）ら

3大会連続出場で日本選手団の主将も務めたベテランの杉浦らがまとめ役となって大会を迎えた。

プロ参加により、韓国や豪州、米国などのライバルは過去の大会よりも格段に強力な布陣で臨んでいた。日本は予選4位で決勝トーナメントに進出し、準決勝では黒木の力投も実らず、キューバに力負け。韓国との3位決定戦では中3日でエースの松坂が先発し、大会後にオリックスや米大リーグでもプレーする韓国の具台晟との投手戦になり七回まで0―0。八回の裏に松坂が3失点し、九回に2点差に追い上げたものの及ばず、ロサンゼルス大会から続いていた4大会連続のメダルが途切れた。大田垣は「松坂は最後まで素晴らしい投球をしてくれた」とたたえ、「攻撃で好機を作れなかった。真っ正面から組み合ってしまった。機動力を使うなど色々な作戦を仕掛けるような練習を積めていたら」と振り返る。

(敬)

短期間で本番に臨んだチームについて、指揮官は「1試合ごとに成長していった」と話す。これまでアマのみの舞台だった五輪にかける思いは、プロとアマの選手で差があったのか―。大田垣はきっぱりと否定した。「皆、日本代表のために自分の役割をしっかりこなしてくれた。プロでもアマでも、目の前の試合に負けたら悔しいに決まっている。同じように悔しがっていた」

そして、シドニー大会以降、プロのトップ選手による「ドリームチーム」結成に向けた機運が高まっていくことになる。（敬称略）

シドニー大会の日本成績

予選リーグ	相手	スコア	主な選手（アマ選手はその後の進路も）
①9.17	米国	●2―4X	松坂大輔（西武）黒木知宏（ロッテ）中村紀洋（近鉄）松中信彦（ダイエー）田口壮（オリックス）杉浦正則(日本生命)沖原佳典（NTT東日本一阪神など）阿部慎之助（中大一巨人）
②9.18	オランダ	○10―2	
③9.19	豪州	○7―3	
④9.20	イタリア	○6―1	
⑤9.22	南アフリカ	○8―0	
⑥9.23	韓国	●6―7	
⑦9.24	キューバ	●2―6	
準決勝 9.26	キューバ	●0―3	
3決 9.27	韓国	●1―3	

※金は米国、銀はキューバ、銅は韓国。表記は当時のもの

全力疾走 未来へ

五輪野球回顧編

題字・稲葉監督

「オヤジ」不在 心一つに

巨人の主力として活躍した中畑清(66)の現役最後の本塁打は、1989年日本シリーズ第7戦、代打で放ったものだった。そして15年後、「監督デビュー」も代打だった。初めてプロ選手のみで編成されたアテネ大会のチームは「長嶋ジャパン」と呼ばれた。肩書はコーチのまま、病に倒れた監督・長嶋茂雄の代行を務めた。「金メダルを取って日本の野球を世界に知らしめる」――。巨人時代から「オヤジ」と慕う長嶋の覚悟も背負って、アテネに乗り込んだ。

(11)

目標の「全勝優勝」へ、順調に滑り出した。キューバ戦では先発・松坂が右腕に打球を受けるアクシデントがありながら九回途中まで投げて3失点。打線も城島、中村ら中軸の本塁打で加点する理想的な試合運びで快勝した。「キューバと準決勝、決勝で当たっても五分で戦える自信がついた」

しかし翌日の豪州戦で想定外の逆転負け。豪州の捕手ニルソンは元大リーガーで、「ディンゴ」の登録名で中日でもプレー経験があった。阪神で活躍していた抑え投手のウィリアムスも含め、日本をよく知るバッテリーに苦杯をなめた。「予選の1敗は痛手じゃない。オヤジだったら『こんなの関係ないよー、大丈夫だよー』って言って、空気を変えていたんじゃないかな。僕はそれができなかった。負けることの怖さを感じてしまった」。どこかで敗戦を引きずりながら再戦した準決勝でも零封負け。金メダルは消えていった。

2004年アテネ 銅

▲ アテネ五輪3位決定戦でカナダを破り、長嶋監督のユニホームを手に記念撮影する日本の選手たち

カナダとの3位決定戦で活躍し、銅メダルに貢献した城島

3位決定戦は大勝し、有終の美は飾った。結局、負けたのは豪州戦の2敗だけ。「長嶋監督と魂は一緒に戦っていると、チームが一つになれた。野球の質では世界にアピールできた」と振り返りつつ、「本当にオヤジが指揮を執っていたら、金メダルを取れていたんじゃないか……」。中畑はつぶやいた。

(14)

五輪はどんなものだったのか。「全身に緊張感があり夜も熟睡できない。こんな中で皆、戦っているのか。野球という世界の中だけでなく、(五輪の)競技全体、世界中から注目されているようなプレッシャーを肌で感じた」。大会を終えると、体重は6キロ減っていた。

五輪後、2012年から15年までDeNAで監督を務めて経験値は上がった。「今なら、空気を変えるギャグの一つも言えると思うよ」。そう言って、笑った。

(敬称略)

アテネ大会の日本成績

予選リーグ	相手	スコア	主な選手
①8.15	イタリア	○12－0	宮本慎也（ヤクルト）城島健司（ダイエー）高橋由伸（巨人）福留孝介（中日）中村紀洋（近鉄）松坂大輔（西武）上原浩治（巨人）和田毅（ダイエー）黒田博樹（広島）
②8.16	オランダ	○8－3	
③8.17	キューバ	○6－3	
④8.18	豪州	●4－9	
⑤8.20	カナダ	○9－1	
⑥8.21	台湾	○4X－3	
⑦8.22	ギリシャ	○6－1	
準決勝 8.24	豪州	●0－1	
3決 8.25	カナダ	○11－2	

※金はキューバ、銀は豪州。表記は当時のもの

5/27

大リーグの年俸削減率案

6段階で10～80％

【ロサンゼルス＝共同】米大リーグ機構（MLB）が26日に選手会に提示した今季年俸案は、高年俸ほど減額率が上がる6段階の基準を設定した上で、実施試合数に比例して一律に削減する方式になっていると27日、AP通信が報じた。

減額率はメジャー最低保障額の56万3500ドル（約6100万円）までは10％、56万3501～100万ドルは27・5％、以下同様に500万ドルまでは50％、1千万ドルまでは60％、2千万ドルまでは70％、2千万ドルを超えると80％で基準額を決める。

今季開催案でレギュラーシーズンは本来の162試合から82試合に減らすことを想定する。基準額は試合数に比例し、さらに50・6％に削減する。ポストシーズンが実施されれば、別途ボーナスを付与する。

AP通信の方式で試算すると、日本選手で最高年俸2300万ドルのヤンキースの田中は約233万ドル、2200万ドルのカブスのダルビッシュは約223万ドル、70万ドルのエンゼルスの大谷は約26万ドルとなる。

選手会は単純に試合数に比例した年俸で3月下旬にMLBと合意したとの立場で、多数の選手が反発。スポーツ専門局ESPN（電子版）によると、100試合以上に増やすよう今週中に対案を示すとしている。MLBが目指す7月上旬の開幕には6月第1週までに合意する必要があるとみられている。

アナザービュー（武智幸徳）

無観客 明日への一歩

新型コロナウイルスのパンデミック（世界的な大流行）を受け、収束までの間、スポーツ界で常態になりそうな「無観客試合」。この言葉にJリーグの村井満チェアマンは抵抗感があるようだ。本来の無観客試合は、何かトラブルを起こしたクラブに対する制裁として科されるものだから。

例えば、2014年3月に浦和に科した無観客試合（埼玉スタジアムの清水戦）は、人種差別的な横断幕の掲出という制裁理由と合わせ、荒涼たる雰囲気が漂った。試合後、清水のゴトビ監督は「声も色もないスタジアムは魂が欠けていた」と語り、選手たちも「こんな試合、これっきりにしたい」と異口同音に述べたものである。

それに比べれば、大相撲が先行し、6月にプロ野球でも行われる無観客試合は、スポーツ界の新たな日常の一部といえるもの。「罪と罰」とは関係のない話である。

コロナ禍を「おごれる人間に対する天罰だ」などと話を広げられたら返す言葉はない。が、ともかく今回のそれは、あくまでも観客を入れて試合ができるようになるまでの移行措置のはず。自主的に入場を制限・自粛するという意味では受け身ではなく、「攻めている」といえるだろう。

そう考えれば、スタンドにお客さんが不在の風景はもの悲しくはあるけれど、「明日」につながることとして、少しは前向きにとらえられるのではないだろうか。

日常的に何気なく使われる言葉に違和感を覚えることはままある（最近なら『自粛警察』もその一つ。こんな言葉が出回り、一番迷惑を被るのは本物の警察だと思うから）。サッカー界で個人的に引っかかるのは「再現性」なる用語である。

攻略ルートも築城術もチーム全員が共有し、テキパキとボールも人も動く姿は端正だ。が、そのさまを「再現性が高い」と毎日の仕事のように褒めるのは抵抗がある。

スポーツというライブエンターテインメントの本質は一回限りの命にある。一度として同じことは起きないから飽きずにスタジアムに足を運ぶ、中継画面の前に座る。その不確実性の中で、水際だったプレーを見せる選手に我々は心からの拍手と喝采を送る。それは繰り返し再現されるものより、めったに再現されないものを見せてくれたことへの感謝に思える。